琉球人の近代西洋との最初の出会い
――バジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記』(1818) を中心に

波　平　恒　男

1　はじめに：ホールの航海記をどう読むか
2　19 世紀初頭のイギリスと東アジア
3　琉球への到着
4　琉球社会への道徳的関心
5　おわりに：近代への展望

1　はじめに：ホール航海記をどう読むか

1816年、イギリスは中国にW・P・アマーストを全権大使とする使節団を派遣した。1793年のマカートニー使節団に次ぐ二度目の使節団派遣であった。この航海の一部として、アルセスト号とライラ号という二隻の艦船が、朝鮮の島々および琉球（沖縄本島）を訪れた。当時のイギリス人、西洋人にとって、それまで朝鮮や琉球は、確実な情報の乏しい、ほとんど未知の国であった。

この航海に伴うイギリス人と朝鮮西海岸の島民たちとの接触は、期間も短く皮相的なものに終わったが、次いでなされた彼らの琉球訪問は、滞在期間がおよそ１ヶ月半にも及び、その間、琉球の人々との濃密な交流が行われた。この1816年のイギリス人の訪問と滞在こそは、その交流の密度から言って、琉球と近代西洋との実質上最初の出会いだったと言うことができる。

使節団のイギリス帰国後、二つの航海記が出版された。一つは、ライラ号の艦長だったバジル・ホールが著した『朝鮮・琉球航海記』(1818) であり、もう一つがアルセスト号の船医ジョン・マクロードが著した『アルセスト号朝鮮・琉球航海記』(1817) である[1]。

1　本稿では、二冊の航海記の表題は邦訳書の題名に従っている（原著はかなり長い表題である）。文献情報は本稿の末尾に掲げた「引用・参照文献」の一覧を参照されたい。ホールやマクロードからの引用に際しては、著者名と邦訳、原著の順で該当頁を注記する。なお、バジル・ホールの名（Basil）は、ベイジルやベージルと表記されることもあるが、本稿ではバジルの表記を用いた。そ

この二冊の著作は同じ航海から生まれた姉妹編のような関係にあり、朝鮮・琉球に関しては内容的に重複する部分が多い。一方、大きな違いとしては、マクロードの著作が使節団のイギリス出発から帰国までの全航海をカヴァーしているのに対して、ホールの著作は、それらのうち朝鮮西海岸の島々と琉球（「大琉球島」）への探検航海のみを詳しく扱っており、しかもその大半は琉球（沖縄本島）訪問の記述にあてられている。この二つの記録、特により広範に普及したホールの航海記は、イギリスだけでなく、各国語への翻訳を通じて広く欧米世界に、琉球事情を初めて詳しく紹介する役割を果たした[2]。

ホールらの訪問以後、19世紀前半の時期には、西洋船が頻繁に琉球近海に出没するようになり、琉球人と西洋人との接触も増えていった。それに応じて、19世紀の琉球に関する欧文の記録も数多く書かれることになったが、それらの琉球に関連した諸文献のなかでも、ホールの航海記は、当時の琉球人を最もヴィヴィッドな形で描き出した作品であるといえる。特に沖縄においては、かつての琉球を高く評価した航海記をのこしたという彼の事績は、帰国の途次セント・ヘレナ島を訪れ幽閉中の前フランス皇帝ナポレオンに琉球での見聞を語って驚嘆せしめたという逸話とともに、一般の人々にもよく知られている。ちなみに2016年には、「バジル・ホール来航200周年」として幾つかの記念行事も催された。学術の分野でも、「琉球英文学」と称するジャンルの文学的研究を中心に、ホールの航海記について論じた論文や文章はかなりの数にのぼる。

私の報告は、1816年のイギリス人による琉球訪問を記録した二つの航海記、特にバジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記』（1818）を中心に、琉球人と近代西洋との出会いについて考察することである。ただし、短い報告なので、ホールの記録の詳細な内容やその批判的吟味にまで詳しく立ち入ることはできない。むしろ、ホールの航海記をどう読むか、その読み方をめぐる問題を重視し、従来の研究とはやや異なった新たな読み方を提案することを課題としたい。

さて、ホールの航海記が伝える当時の琉球に関する一般的な印象は、平和で牧歌的なイメージのそれであった。すなわち、琉球は武器もなければ貨幣もない小さな島国だが、人々は礼節正しく、正直で人情に厚く、満ち足りた幸福な生活を送っているという、いわば「地上の楽園」に近いイメージであった。

しかし、そのような琉球をめぐるイメージは、その後の西洋からの来訪者たちの記録では、次第に色褪せたものになっていく。19世紀中葉までに琉球にやってきた西洋人は、大抵の場合ホールの記録を意識しながら琉球を観察したが、彼らの遺した記録を読むと、

の他の文献についても脚注では著者名と該当頁のみを記す。なお、引用文も原則として邦訳書に従うが、ただし幾つかの箇所で参考までに筆者（引用者）自身の手で括弧を用いて英語原文を挿入してある。

２　マクロードよりホールの航海記がより広く流布したことについては、Grayson, p. 4.

ホールの記録の信憑性の評価は、またそれとも関連して琉球それ自体の評価も、漸次低下の一途を辿っていることが分かる。その変化の細かな紹介はここでは省くとして、1853年に琉球を訪れた例の「黒船」で有名なペリー提督は、「ホール艦長の記録は単なる物語（a mere romance）に過ぎない。即ち歴史的真理について大して厳密でない一著作家の創作的頭脳からの産物である」[3] とまで酷評している。

ペリーが指摘するように、ホールの訪問以後、琉球人の外国人との「交際態度」が少なからず変化したことは確かであろう[4]。しかし、それに劣らず重要なことは、ホール後の時代には、琉球を訪れる欧米人の「交際態度」や、そもそも琉球を観察する眼それ自体が、大きく変化していったことである。

J・H・グレイソンは「発見の時代」から「帝国主義の時代」へという単純だが便利な用語法で、このようなホールの来航までと、それ以後の時代との変化を説明している[5]。ホールらの朝鮮や琉球への航海は、この地域（極東）における二つの時代を分かつ過渡期、もっと広く言えば、コロンブスらの大航海に始まる「発見の時代」の最終局面に位置づけることができる。その点で、ホールの航海記が「発見の航海（voyage of discovery）」[6] を表題に掲げているのは、彼らの訪問の性格と時代背景を端的に表現して象徴的であるといえる。

私見によれば、ホールの航海記はとりわけ次の二つの条件に恵まれたことで、われわれにとって稀有で貴重な記録となっている。第一に、上述のごとく、その琉球訪問が「発見の時代」から「帝国主義の時代」への過渡期になされたという時代背景であり、第二に、その琉球での体験を記録した著者自身、すなわちホールという人物の個性や才能という要素である。第二の著者の個人的資質という点で付け加えておくと、ホールは元来「科学者」としての素養に富んだ人物であり、さらには、「近代的」価値観・道徳観の体現者であり実践者であった。彼の著作を読む限り、彼の道徳観はスコットランド啓蒙主義（例えばアダム・スミスの『道徳感情論』）に見られるような近代的性格を持っていたと言うことができる。

私が提起したいホール航海記の「読み方」というは、ホールにおける「道徳的関心」と

3　『ペルリ提督日本遠征記』（２）、160頁。Hawks, p. 220.

4　「一言で云へば、琉球人の交際態度の特徴をなしてゐたものは鄭重な疑惑であつた。……住民は本来不愛想ではないやうであるが、吾が士官の経験によれば、彼等が単純な人民であり親切であり気に叶ふ人達であると考へ続けることが次第にできなくなるのをどうすることもできなかつた。艦長ベージル・ホールの語ったことが間違つてゐたのでもあり、彼の訪問以後に国民の特性が変化したのでもあつた。」同上、28頁。Hawks, p. 160.

5　Cf. Grayson, pp. 1-2.

6　ホールの航海記の原題は、*Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea, and the Great Loo-Choo Is-land.* という長いタイトルである。

いう視点・論点を重視して読解することである[7]。すなわち、ホール（およびマクロード）はそのような関心を持って琉球を観察し、当時の琉球社会や琉球人の道徳的水準を高く評価する記録をのこした。そのような観察と記録は、ホールの時代にのみ、そして多分にホールのような人物によってのみ可能であった[8]。そのため、幾多のありうべき限界にもかかわらず、ホールの記録には、琉球の伝統における「近代的・普遍的なるもの」への、ないしはその萌芽的ポテンシャルへの認識が含まれていると言うことができる。そして、それらのうちには、その後の琉球・沖縄が実際に歩むことになった歴史の現実においては、無残にも失われ、あるいはポテンシャルが花開くというより、むしろ抑圧され枯渇してしまったもののほうが多いかもしれない。そうした琉球・沖縄における「近代の得失」への洞察を可能にする格好の史料 —— 私が提起したいのは、ホール航海記のそのような読み方である[9]。

2　19世紀初頭のイギリスと東アジア

⑴ 近世の琉球王国

現在の沖縄県の中心をなす沖縄本島に琉球王国の統一政権が成立したのは、1420年代であった。それ以前には、山南、中山、山北と呼ばれる三つの政治勢力が鼎立していたが、すでにその時代の末期以来、琉球は中華帝国（明・清）と朝貢関係を結んでおり、その関係は約500年に及んだ。

15～16世紀には、琉球王国はその地の利を生かして、中国との朝貢貿易を基軸にしながらも、北は日本や朝鮮、南は東南アジア各地と海上交易を盛んに行なった。一般に、尚真王（在位1477-1527年）の時代がその繁栄の盛期とされる。また尚真王の治世には、対内的にも統一王権としての統治機構の整備が進み、支配層（各地の按司など）は王都の首里に集住するようになった。その過程で、王府による武器類の管理（支配層の武装解除）が進められ、それ以降、琉球王国は政治的にも文化的にも「非武」を特徴とするようになっ

7　すでに二冊の航海記の刊行直後の時期に、『エディンバラ・レビュー』掲載の長い書評において、F・ジェフリーは次のように述べている。「この二冊は、われわれの国を誇りに思わせ、人類に満足する気持ちを起こさせる。奇妙な情報も大いにあるが、この二冊の書物の最大の魅力は、何と言ってもその道徳的な興味（*moral* interest）である」。*Edinburgh Review*, Vol. 29(1818), p. 475. なお、ここでの訳文は山下重一の次の翻訳に従った。「フランシス・ジェフリ『ホール艦長の琉球航海記』書評」『國學院法学』第42巻第３号、2004年、36頁。

8　これは、多かれ少なかれマクロードについても妥当する。ただし、マクロードには通俗的表現が多く、レトリックに走りがちな傾向が見られるのに対して、ホールの記録はより詳細で、冷静かつ公平な観察への志向が強いということができる。

9　筆者のこのような問題意識の根底には、ドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマスと同様な「近代」理解があるが、詳しくは別の機会に論じることにしたい。

たと考えられている。

琉球王国は、1609年に薩摩島津氏の侵攻に遇い、降伏した。その後、琉球は独立国の体裁は回復するものの、薩摩島津氏の政治的統制と経済的搾取を被るようになる。また、薩摩との関係を通じて、徳川政権の影響下にも置かれることになった。しかし、そのような琉球と薩摩および日本との実際の関係は、中国をはじめ諸外国には「隠蔽」されなければならないことになっていた。中国から冊封使節が訪れた場合や、その他の外国船が難破して漂着した時などには、日本の影響が目につかないように、様々な工夫がなされた。もし外来者に日本との関係を尋ねられたら、まったく関係ないこと、日本的に見えるものがあるとすれば、それは日本との中間にある吐噶喇諸島からきたものだと答えることになっていた。同様の説明は、19世紀の西洋から訪問者に対してもなされ続けたであろう。

ホールを読むに際しては、このような琉球王国の地位からくる特殊な事情を押さえておく必要がある。特に日本（薩摩）との関係で、外国の船や人、特に西洋のそれは歓迎すべからざる存在であった。もし漂流その他の理由でやってきたなら、必要物資を無償で提供した上で、できるだけ早く帰ってもらうというのが、琉球王国の原則的立場だった。

⑵ イギリスと東アジア

ホールやマクロードの航海記を読むにあたっては、彼らが中国・朝鮮・琉球を訪れた1816年前後の時点でのイギリス（ブリテン帝国）を取り巻く状況について押さえておく必要がある。

当時のイギリスは、18世紀の後半以降の経済発展を背景に、世界システム上のヘゲモニー国家として台頭しつつあった。一般に、イギリスの産業革命は1760年代から1830年頃までとされている。まず指摘すべきは、1816年という時点がその途上、しかも後半の只中に位置することである。近年の研究では、この時期のイギリスの経済成長を過大視すべきではないという主張も強いようだが、綿織物業を中心に製鉄業その他の分野で技術革新が相次ぎ、機械制工業が急速に発展していたことは確かである。こうした18世紀後半の国内経済の発展と併行して、イギリスはフランスとの七年戦争（1756～63年）以降、東インド会社を介してインド内政への関与を次第に深めていくとともに、さらに東アジアへの利害関心の拡大させていた。

18世紀末から19世紀初めにかけて、インドに拠点を置くイギリスは中国との貿易をますます拡大し、いわゆるアジア「三角貿易」の構造が出来上がりつつあった。イギリスは中国から茶を輸入し、インドには機械製綿織物を輸出、そしてインドからは中国にアヘンが（密）輸出されるという貿易構造である。

当時の中国は、対外貿易を広州（広東）一港に限定する管理貿易体制を敷いていた。ヨーロッパ諸国はその広東システムの下で、中国特許商人（公行）を介して商取引を行うことができたが、その貿易慣行は西洋的な条約に基礎を置くものでなく、そのために様々な支

障を生じさせがちであった。イギリスの二度の使節団派遣は、それらの不都合を取り除くこと、できれば国交樹立と条約の基礎の上に貿易を据え直すことで、貿易の拡大や自由貿易を実現することを目的としていた。しかし、それらの要求は中国側に拒絶され、二度の使節団派遣はいずれも所期の目的を達成できず失敗に終わった。

次に指摘すべきは、1816年がナポレオン戦争（1796～1815年）終結の翌年に当たり、ヨーロッパではようやく長期の戦争に伴う騒々しい状況が収束したところだったことである。戦争の期間中は、イギリス政府や王立海軍の極東地域への関心も一時的に中断された。しかし、1790年代中葉のプロビデンス号の北太平洋探検航海（後述）から約20年の空白期間を経て、イギリスの極東への関心も復活し、アマースト使節団が中国に派遣されたのを機会に、ホールらの乗った二隻の艦船の朝鮮および琉球への探検航海が実施されたのである。

また、ヨーロッパ大陸での戦争の火の粉は世界各地の植民地にもおよび、東南アジアでもオランダ支配下にあったジャワは一時、イギリスの占領下に置かれた。その間、イギリスはジャワにおいて様々な改革を実施したが、ウィーン会議の結果、ジャワは再びオランダに返還されることが決まっていた。ホールらが帰航の途次ジャワを訪れたのはその返還前の時期のことで、前述のように全航海をカヴァーしたマクロードの著作では、オランダの植民地支配の過酷さと、それとは対照的なイギリスによる啓蒙主義的改革とが対比的に描かれ、後者の実績が誇らしげに論じられている[10]。

⑶ 朝鮮の島々への航海

前述のように、1816年の段階の西洋諸国にとって、朝鮮や琉球はほとんど未知の国であった。18世紀までは西洋船の本格的な来航はなかったが、朝鮮や琉球について知識の進歩が全くなかったというわけではない。その点で重要なのが、北京在住フランス人のイエズス会士アントワーヌ・ゴービルによる情報である。特にゴービルが1758年（および81年）に発表した琉球に関する論文は、1719年に冊封副使として琉球に渡った徐葆光の『中山伝信録』に主に準拠しながら、彼が北京で収集した情報を付加して書いたもので、マクロードの航海記でも長々と引照されている。朝鮮についても、中国にいたイエズス会士が書いた文献がわずかながら流布してはいたが、正確な情報は乏しかった。

西洋船の来航という点では、W・R・ブロートン率いるイギリス艦船プロビデンス号による北太平洋探検調査も忘れてならない。プロビデンス号は1796年に北海道室蘭港を訪れたことでも知られるが、翌97年には、ブロートンは琉球および朝鮮とも接触している。同年５月、プロビデンス号は琉球の属島である宮古島近くのリーフで座礁し、沈没する事

10　マクロード、163-73頁。

故に遭うが、乗組員は補助船のスクーナー船に乗り移った後、宮古（池間島）の島民に救助され、懇切なもてなしを受けた。一旦マカオに戻ったブロートンは、スクーナー船のみによる探検調査の再開を企て、その一環として朝鮮南岸の港（釜山）に入港、済州島の一部の測量を行なっている。それらの様子はブロートンの航海記にも記されている。しかし、その航海記が出版されたのはナポレオン戦争中の1804年のことで、グレイソンによれば、その刊行のタイミングの悪さもあって、ブロートンの航海記は西洋世界でほとんど知られることがなかった[11]。

さて、ホールらの朝鮮への航海に話題を移そう。ホールらの一行は、アマースト大使らが首都訪問のため下船した天津下流の白河河口を８月11日に出港し、渤海を東に向けて横断、朝鮮西海岸近くを南下しながら、合わせて四つの島に上陸し、島の住民たちと接触している。その詳細はここでは略するが、三番目に上陸した島では、ホールらが「首長」と呼ぶ人物を含め高位の役人らしき人々とも会い、彼らを船上に招待し饗応してもいる。しかし全体として言えば、ホールらの朝鮮の印象はネガティブなものであった。少なくとも、琉球の場合と較べると、双方の出会いは三番目に上陸した島も含めて表面的な交流にとどまった。

琉球と朝鮮とでそのような相違を生じた理由は数多く考えられる。大きく二つだけ挙げておくと、朝鮮で上陸したのは半島本土ではなく、西海岸の小さな島々であったのに対して、琉球では当時の琉球王府の役人の監視がそれなりに行き届いた那覇に来航したという違いと、朝鮮と琉球双方の地での意思疎通における翻訳の問題、すなわち通訳者の存在の何如という点を指摘できるであろう。実は、ホールらの一行のうちには一人の中国人が含まれていたが、彼は朝鮮では通訳としてまったく役に立たなかった。そのため、双方の意思疎通は身振り手振りという原始的な手段に頼るしか術がなく、最低限のレベルのそれに終始したのだった[12]。

それに対して、琉球ではその中国人の話す言葉（広東方言）をどうにか理解できる者がいただけでなく、何よりも重要なこととして、琉球人の幾人かの役人がごく短期間のうちに英語を習得し、それなりに内容を伴った意思疎通を可能にしたのである。

3　琉球への到着

(1) 好意的な人々

ホールらの乗った二隻の艦船は、朝鮮から南下し、９月15日、「大琉球島」（＝沖縄本島）

11　Grayson, p. 3.

12　ホールは朝鮮の報告を総括して「この調査報告の内容がはなはだ乏しく、かつ脈絡を欠いているのは、ひとえにわれわれのこの海岸での滞在が短かったことにくわえて、住民との意思疎通がきわめて困難だったためである」と書いている。ホール、87-8頁。Hall, pp. 56-7.

南部の西海岸近くに到着した。それから10月27日に那覇を出港するまでの43日間が、彼らが琉球に滞在した期間である。

９月15日、ホールらの艦船が糸満沖にやってくるや、数隻のカヌー（サバニと呼ばれる小さな舟）が近づき、現地人たちがたちまちライラ号に乗船してきた。

> われわれは、これほど好意的な人々に出会ったことはかつてない。彼らは舟を横づけにすると、すぐ一人が水の入った壺を、もう一人は、ふかしたサツマイモの入った籠を差し出したが、代価を要求したり、ほのめかしたりするようなことはない。その態度はおだやかで、礼儀正しかった。……このようなことはすべて、よい前兆であるように見える。朝鮮人の冷たい反撥的な態度に接したあとだけに、うれしさもひとしおであった。[13]

翌16日、二隻の艦船は安全を確かめながら那覇港の泊地、町から半マイルの位置に停泊した。すると、両艦はたちまち「現地人を満載したカヌーの群れ」に取り囲まれてしまった。「彼らはぞくぞくと艦上に登ってきた。子供たちも大勢加わっていた。」「両艦の正面にあたる海岸は、住民たちでびっしり埋めつくされていた。」[14]

さらに17日も、同様な状況が繰り返された。

> 午前中いっぱい、二つの艦と陸の間の海はカヌーにおおわれてしまっていた。それぞれのカヌーが十人前後の人数をのせている。この訪問者たちが、長時間艦上にとどまることは稀だったので、来る舟、帰る舟がひっきりなしにすれちがう。じつに活気にあふれた光景であった。このようにして艦を見物に来た人々の数は数えきれない。彼らは艦の上を自由にみることを許されて大喜びであったが、決してその自由を濫用するようなことはなかった。その立居振舞も、もっとも身分の低い者たちでさえ、上品で節度がある。好奇心は旺盛であったが、無作法な詮索などはみられなかった。[15]

このように停泊中の両艦には、好奇心旺盛な大勢の住民だけでなく、むろん琉球の役人たちもやってきた。16日には検視の役人たちが来て来航の目的を尋ね、翌17日には二人の「首長」と従者たちがアルセスト号を訪問、マクスウェル艦長と会見した。艦船の傷みの補修のためという来航目的の説明に対して、二人はできるだけの援助を約束した。マクスウェル艦長は国王を表敬訪問したいという要望を告げているが、琉球の役人たちはこの種の質問や要求には、その時だけでなく、その後も言を左右に託して応じなかった。また、イギリス側も必要以上に無理強いすることはなかった。

ところで、二隻のイギリス艦船の来航や住民の動向は、到着の初日から逐一、首里に所在する琉球王府に報告されていた。那覇に着いた16日には、幾つかの指令が出されたが、

13　ホール、94頁。Hall, pp. 61-2.

14　ホール、96、98頁。Hall, p. 63, 65.

15　ホール、104頁。Hall, p. 69.

それには「女共阿蘭陀人え不見様」取り締ること、すなわち女性たちを外国人の目に触れさせないようにせよ、ということが含まれていた。さらに17日には、外国船に近づくことは「大禁」なので、見物をやめさせるように指図したことが報告されている[16]。

ホールの航海記を読む限り、確かに、それ以降は二隻の艦船に住民が殺到するようなことは止んでいるように見える。しかし、今度はイギリス側が船の修繕作業や乗組員の休養などを理由に島への上陸許可を求め、琉球側もまもなく譲歩して、那覇近郊の一定の地域に範囲を限っての上陸を認めた。かくして、住民を含めて双方の交流はその後も続き、信頼関係が深まっていったのである。また、マクスウェル艦長が琉球の役人たちをアルセスト号に招待したり、逆に琉球側が艦長をはじめ主だった将官を仮の「公館」（既存の寺院があてられた）に招待するなどの形で、相互に饗応の席が幾度か設けられている。さらに、上記の寺院の建物と境内は、船の修繕作業のためにも、また病気の将兵の療養施設としても利用されたが、その作業や看護には多くの琉球の人々も協力している。

かくして数週間の滞在の後、10月27日、二隻の艦船は那覇港の泊地を抜錨し、南西の海へと去っていく。その別離を惜しむ場面がホールの航海記における最も印象的なシーンの一つをなしているが、ここでは立ち入らないことにする。

⑵ 武器も貨幣もない？

ホールの航海記で最もよく知られ、最もよく議論されてきたのが、琉球には武器もなければ、貨幣もないというトピックであった。本題からは少しそれるが、短く触れておこう。

まず、ホールは、貨幣の存在に関連して次のように述べる。

> 彼らの間には貨幣が存在しない。そしてわれわれが見聞した限りでは、その使用法さえも知らないようである。中国を訪れたことのあるものが知らないはずはないと思うのだが、スペイン銀貨はもとより、われわれの持っていた各種の金貨の価値もわかる者は一人もいなかった。[17]

結論から言えば、当時の琉球には貨幣は存在した。鳩目銭という琉球の鉄銭のほか、寛永通宝などの日本銭が使用されていた。しかし、前にも触れたように、日本との関係は外国に対しては隠すことになっており、その一環として、日本銭だけでなく、一切の種類の貨幣を外国人の目に触れさせないようにする政策がとられていたのである。

他方、武器については、次のように述べる。

> われわれは、いかなる種類にせよ武器というものを見ていない。島の人々も、武器は一切ないと断言していた。マスケット砲を発射した時の様子をみれば、火器を知ら

16　ホール、95、99-100、108頁に引用・挿入されている琉球側の記録「異国日記」該当日付の記事からの抜粋を参照。

17　ホール、270頁。Hall, p. 208.

ないことは確かだと思われる。[18]

このトピックについても、結論だけ述べれば、当時の琉球には武器類がまったく存在しなかったというわけではなかった。武器類は首里の王府により管理されるか、那覇にあった薩摩島津氏の出先機関（在番奉行所）によって管理されていた。重要なのは、琉球では、那覇の地方官を含めた王府の役人、すなわち士の身分の者といえども、刀剣などの武器類を持ち歩くような習慣はなかったことである。

4　琉球社会への道徳的関心

先述のように、ホールらの琉球訪問は二つの時代の過渡期に行われた。「発見の時代」とは言っても、それ以前には西洋船の意図的な来航自体がほとんどなく、またそれ以降は、主には西洋側の来航目的や「交際態度」が漸次「帝国主義」的なものに変質することによって、双方の対等な交流がますます困難になっていった。そうした大きな変化の分水嶺の時期に、ホールたちはやって来たのである。こうした条件にも恵まれて、ホールには、琉球人と親密な交流ができたことを格好の機会にして、琉球社会や琉球人の性格をできるだけ内在的に理解していこうという志向が顕著に見られる。

ホールは、琉球人との交流における多数の事例ないしエピソードを記録し、そこから一般的な結論を引き出している。その場合、彼の一般的結論も重要であるが、“真理は細部に宿る”という格言もあるように、数多くの個々の観察もそれに劣らず貴重である。彼は、その後来訪した欧米人には見えなかった琉球の多くの側面を観察できた。彼が引き出した一般化には限界があったにしても、彼が観察した個々の事実は、当時、事実として存在したし、生起した出来事だった。私見によれば、ホールの著作は、そのような個々の事実観察を実に数多く含んでいる点に真価がある。

しかし、本報告の限られた時間・紙幅では、それほど多くの事例を採り上げることはできない。前述のように、ホール（およびマクロード）には、イギリス人の滞在中の行動や琉球人の行動や文化を「道徳的次元」を重視しつつ観察していく傾向が見られる。以下では、彼らがそのような目で見た琉球社会や琉球人の特質について、項目を分けて摘記しておく。

⑴　寛大さ、正直という美徳

当時の琉球には、薩摩の支配的干渉を介する形で日本のいわゆる「鎖国」政策の影響が及んでいた。そうした海禁政策の一環として、外国人を上陸させることは法令レベルでは禁止事項に該当した。しかし、ホールらの来航の時点では、それらの規則もそれほど厳格

18　ホール、272頁。Hall, p. 209.

には実施されていない。マクロードは、次のように書いている。

外国人が、彼らの海岸に上陸することは、疑いもなく彼らの既存の法規に反するものだったが、しかも、彼らはできるかぎりの寛大な処置をとり、その言い分を譲歩してくれた。というのも、彼ら自身、その非社交的な法則と戦っているらしかったからである。士官の誰かがかねて定められていた境界線を超えて、その向こうの地区にさまよい出ると、彼らは、中国やモロッコでのように乱暴に押し戻すことせず、係りのものが責任を問われないように、彼らにたいする好意として、引き返してくれるように穏やかに懇請した。そして、その訴えは説得力を持っており、一度も無視されることはなかった。[19]

この文章からは、相手の立場になって考える、ないしは公平な第三者の視点から判断するというアダム・スミス的、近代的な道徳観が、双方の側の行動を律していたことを読み取ることができる。確かに、ホール後の時代には、上に描かれたような寛大な協調はますます困難になっていく。しかし、そうであるからと言って、ホールやマクロードがそのような（近代的な）道徳的、人倫的な観点から、当時の琉球社会や琉球人の行動を観察し、その水準を高く評価したという事実の重みまで否定されてはならないだろう。

ホールらは、琉球社会の顕著な特性として、正直さ（honesty）という国民的性格をあげている。イギリス人との交渉において琉球の役人たちは、事実をありのままに話すことが不都合な事柄については、無知を装ったり、時に相矛盾することを述べたりもしている。しかし、ホールらが重視したのはそのようなことではなく、琉球社会の全体としての様々な特質のほうであった。そのような特質の一つとして、「この島の人々とつきあってきたあいだ、物が盗まれたことは一切なかった」[20]ということを挙げている。

身分の上下にかかわず、この島の人々の上品で魅力的な態度は、士官ばかりか水兵たちの好意もかち得ていることが早くから観察されることは興味ぶかいことである。事実、最初から琉球人たちは完全な信頼をもって扱われた。彼らを監視することもなく、艦内の一部の立ち入りを禁ずることもしなかった。にもかかわらず盗まれた品物は何一つなかったし、仮に何かが紛失したとしても、一瞬たりとも現地人が持ち去ったのだろうと疑うものはいなかったのである。[21]

また寺院には、運び込んだアルセスト号のあらゆる種類の貯蔵品がところかまわず置き散らかしてあったし、大工や兵器工の道具も同様であった。そして、観測所でも、観測機械、書籍、鉛筆などが覆いをかけただけで放置してあった。そして何百という群衆が毎日やって来て、何でも好きなものを見たり、いじったりしていた。にも

19　マクロード、70-71頁。M'Leod, p. 109.

20　ホール、276頁。Hall, p. 213.

21　ホール、149頁。Hall, p. 105.

かかわらず、ただ一つの品物といえども紛失したことはなかったのである。この正直さ（this degree of honesty）は、琉球人を、中国人をはじめ南太平洋やマレー群島の住民などと区別する、きわめて重要な特徴である。[22]

このような琉球の顕著な特質と関連して、注目すべきことに、ホールは「琉球の人々はいちじるしく文明化している（considerably civilised）。人々は無欲で、完全に満足しているようにみえる。正直は、社会がこのように充足していることの当然の結果であるのかもしれない」[23] と述べている。これらから読み取ることができるように、ホールは「文明化」の如何を道徳水準の高さや社会の幸福度、すなわち人々のあらゆる面での満ち足りた生活のうちに見出し、生産力の発達やその結果としての「繁栄」や「富」の次元に還元しては考えていない。

⑵ ソフトな社会秩序

ホールやマクロードでは、社会の階級差ないし身分差に着目していく傾向が強く認められる。これは恐らく、当時のイギリスが階級間の格差の大きい社会（階級社会）だったことを反映していよう。そのような彼らの目から見れば、琉球は階級差の小さな社会であり、しかも全体としての秩序が、いわば暴力や強制性を伴うこともなく整然と保たれた社会として映っていたといえる。ホールは、それを広い意味での刑罰（＝処罰、punishment）と結びつけて次のように述べる。

われわれは、琉球においていかなる種類の刑罰（punishment）も見たことはない。われわれの知る限りでは、扇子による軽い一打ち、あるいは怒りを込めた眼差しが、もっともきびしくまたしばしば行われる刑罰であった。命令を下す場合には、首長たちは断固としてはいるが穏やかであり、人々は喜んで従う。一方には尊敬と信頼が、他方には思いやりとやさしさが存在するようにみえる。われわれがもっとも注目した中国と琉球の相違は、この点であった。中国においては上下の階級の間に、いかなる種類の寛容も、友好的な理解も認められないのである。[24]

こうした支配関係の穏やかさも、ホール以後の「帝国主義の時代」になると、少なくとも外国人との交渉に関連した場面では相当に失われていくことになる。

⑶ 子供と女性たちの地位

社会の道徳的な質を観察し判断する基準には、階級関係、すなわち階級間の格差や行動様式の差異に着目することの他にも、様々な観点がありうる。大人と子供の関係、世代間

22　ホール、276-77頁。Hall, p. 213.

23　ホール、277頁。Hall, p. 213.

24　ホール、272-3頁。Hall, p. 210.

の関係がどうなっているかに着目するのもその一つである。ホールらは滞在中、琉球の女性たちを観察する機会は極めて限られていたが、その反面、子供たちとは接触する機会が多かった。ホールらが自ら認めるように、通常想定されるよりもその機会は多かったといえる。琉球では、大人たちはどこへ行くにもよく自分の子供を同伴したからである。そして、その大人たちが子供をどう扱っているかを、ホールらは実に注意深く観察している。その観察の眼の核をなしているのは、子供の自主性や人格が尊重されているか、人格を持ちつつも保護を必要とする存在として、伸び伸びと大切に育てられているかという点にあったといえる。

ここではそれらの個々の事例の紹介は残念ながら省略せざるをえないが、ホールが下した結論は次のようなものであった。「子供をこのように扱うことによって、大人と子供の相互の信頼と自由な交流はますます強められるのである。少年たちが容易にわれわれと親しんだのは、このような教育法のたまものである。」「少年たちは、いかなる野生的（wildest）なイギリスの生徒にもおとらぬ活気に溢れていたが、それにもかかわらず、野蛮さ（rudeness）の片鱗すらも見出すことができなかった」[25]。「以上のわずかな例ではあるが、これらに示された特性は注目に値する。中国や、その他の東方諸国においてわれわれが目撃した教育法が、大人の縮小版のような子供を作ってしまうのとは大いに異なっているのである。」[26]

つぎは女性の地位についてである。先に触れたように、琉球王府は女性を外国人の目に触れさせないという政策をとっていた。ホールらは、琉球人がそのように外国人の目から女性を隠そうとすることや、琉球人が女性の話題を避けたがることをとても不思議がり、その理由についてあれこれ詮索している。琉球の男たちが示すその他の一般的特性と較べ、こと女性の扱われ方には相当程度の落差があると感じたからである。

> 〔琉球人は〕複数の妻を持つことを許す中国の習慣について語るとき、誰もが嫌悪感を示し、イギリスの習慣が、この点については琉球と同じであるのを知ると非常に喜んだ。もっとも、男性の穏和さ、物事に対する考え方の寛大さなどから予想したほどには、女性が正当な扱いを受けているとは認められない。上層の婦人たちは完全に家にとじこめられているし、下層の婦人たちは生計のための重労働に駆使されている。われわれは大勢の女性が、荷物を頭にのせて運んでいる姿を遠くから見かけたものである。[27]

25　ホール、275頁。Hall, pp. 211-2.

26　ホール、276頁。Hall, p. 212.

27　ホール、269頁。Hall, p. 207. ちなみに、引用文中の「生計のための重労働に駆使されている」の部分は、原文では perform much of the hard work of husbandry であり、必ずしも「駆使される」のニュアンスはない。

このように、男性－女性の関係、社会における女性の扱われ方という点では、ホールの評価は甘くなく、むしろかなり低かったというべきだろう。引用文の後段に関連して述べておくと、琉球人は一般にホールらと女性のことを話題にすることを避けたが、ホールは琉球の「上層の婦人」については、後述のように通訳の役を務めた王府役人の真栄平からそれなりの情報を得ていた。また、女性を外国人の目に触れさせないという琉球側の施策にも拘わらず、ホールらは二隻の艦船に備え付けられた望遠鏡を使って、港の反対の岸で外国船を見物する女性たちだけでなく、遠くで働いている女性たちの姿も観察しており、それらのなかには「荷物を頭にのせて運んでいる」女性たちもいたのである。

しかし、この女性の地位という問題に関しては、ホールらの体験はあまりにも限られていた。ホールの記録を読む限り、彼らは、女性を外国人の目から隠すことが琉球王府により体系的に実施されていた政策だったことを深く見抜いてはいない。また、外国人から女性を隔離することと、社会生活一般で女性たちが隔離されることとは、まったく別の事柄であるのはいうまでもない。

⑷ 宗教的寛容

琉球人が階級（ないし身分）間で、また子供を扱う場面で示す「寛大さ」や「寛容」の問題と別に、宗教に関わる寛容についても取り上げるに値する。ただし、ここでひとまず「宗教的寛容」と呼んでいるのは、琉球内部での宗教間の関係のことではなく、キリスト教と琉球の宗教を等価的・同格的なものと見なし、相互に尊重し合うという考え方や行動様式のことである。この点で、イギリスと琉球の双方どちらの側にも、自己の宗教や宗教上の慣習を絶対視する姿勢が見られないこと、特にホールには（そしてマクロードにも）彼らのキリスト教的価値観から相手（琉球人）を見下すような観察上の視線や、相互行為上の姿勢がないことは注目に値する。自己の価値観を押し付けないというのは、双方の対話による交流の場合だけでなく、ホールらの琉球での行動一般についても指摘できることである。

そのことを象徴的に示している事例の一つが、琉球で亡くなった一人の水兵の葬儀をめぐるエピソードである。ホールらが琉球に着いたとき、「病人は数こそ多くはなかったが、重症だった。そして、その回復は、大部分を、現地民の親切に帰してよかった」[28]。しかし、以前から病状が絶望的だった一人の水兵が亡くなり、琉球側が用意した墓地に葬られた。葬儀はイギリス式で行なわれ、それには琉球人も参列したが、その琉球人たちが相手側の慣習を尊重する態度を示したことを、そして翌日には琉球人が今度は彼らのやり方で丁重な葬送の儀礼を執り行なってくれたことを、ホールもマクロードも高く賞賛している。

28　マクロード、72頁。M’Leod, p. 111.

また、ホールらの乗った二艦が帰国のため琉球を離れる当日の朝、琉球人が自分たちの宗教的慣行に従って寺院に供物を捧げ、恙なく本国に帰れるように航海の安全を祈願してくれたことについて、マクロードは次のように記している。「この別離のしかたには、崇高と仁慈とが合わさった趣があり、もっと文明が開けた国々の、このうえなく洗練された儀礼よりも、はるかに胸を打つものがあった。それは、なんらの技巧もない天真爛漫な心からの親切心だった。」[29]

1840年代になると、フランス人、イギリス人の宣教師が来琉して長期滞在するようになるが、彼らの記録では、ある意味では当然とも言いうるが、双方の側とも上のような寛容の眼や態度を示すことはなくなっている。

(5) ジェントルマン的行動様式

ホールやマクロードには、イギリスのジェントルマン的理想という価値観を前提に琉球社会や琉球人を見ていく傾向が顕著に見受けられる。

前述のように、琉球では幾人かの比較的若い役人が短期間のうちに英語を習得したことで、密度の濃い意思疎通が可能となった。真栄平、安仁屋、奥間といった人物である。なかでも真栄平は、英語の上達の速さという点だけでなく、その立居振舞いの優雅さ、上品さという点でも傑出した人物として評価されており、また、イギリス側との交流や交渉の場面に常に立ち会ったことによって、ホールの航海記における最も主要な登場人物となっている。

> 彼〔真栄平〕は常に快活で、よくふざける。しかし、礼儀をわきまえており、その線を決して超えない良識を持ち合わせている。作法上、厳粛な振舞いが要求される場合に、彼ほど完璧にそれに従える者はいない。同じように、座が陽気ににぎわっているとき、もっとも派手にはしゃぐのも彼である。[30]
>
> 自分の社会においてどのような地位にあるにせよ、このような後進的な地域に育った真栄平が、丁重さ、自己抑制、立居振舞の優雅さなど、文明国（civilized nations）において、経験上もっとも好ましく有利であると考えられているような種類の社交上の行動様式を身につけているのを見るのは、好奇心をそそられることである。[31]
>
> 真栄平は、まったく、紳士（gentleman）だといってよかった。それも、この手本、あの規則に則って作られた紳士だというのではなく、“自然の至妙な手によって形作

29　マクロード、86頁。M’Leod, p. 134.

30　ホール、210-11頁。Hall, p. 157.

31　ホール、212頁。Hall, pp. 158-9. ちなみに、引用文中の「このような後進的な地域」の原文は a country so circumstanced で、文脈からして、西洋諸国から遠く離れた東洋の小さな島国というほどの意味であり、「後進的な」のニュアンスはない。

られた（ stamped as such by the soverein hand of Nature）” 紳士だった。／琉球人たちはすべて、礼節の正しさを恵まれているらしく、それは生得のものだといっても、いいすぎではない。そこには、矯正されたもの、ぎこちないもの、努力の加わったものは、なにひとつなかったからである。[32]

⑹ 学習能力と向上心

琉球は、武ではなく、文に価値をおく社会だった。また、社会的昇進においても、家格の原理だけでなく、業績の原理も重視された。真栄平らは、わずか三週間ほどで英語の文章を話せるほどにまで上達しているが、その学習の早さには彼個人の資質だけでなく、琉球社会の特質が反映していよう。

ホールやマクロードは、真栄平らの熱心な勉強ぶりについて記すだけでなく、その英語力が意思疎通に十分な程度のものだったことがイメージできるように、彼らが話した英語のセリフをそのまま書き留めている。リアリティを如実に伝えんとする彼らの客観性志向の現れでもある。例えば、真栄平がイギリス人や彼らの慣習などに強く関心を示し、熱心に学ぼうとするので、ホールらは彼をイギリスに連れ帰り、勉学の機会を与えた後、帰国させたらどうだろうかという気になり、彼に提案したところ、「彼はしばらく考え込んだ挙句、首をふって答えた。／『私がインギリス行くと、――父、母、子供、妻、家じゅう泣く！行かない。だめだ、だめだ、皆泣く！』（I go Injeree, ――father, mother, childs, wife, house, all cry ! not go, no, no, all cry ! ）」[33]

最後にマクロードから、一見些細のようだが、興味深い逸話を一つ引用しておこう。前述のように、二隻の艦船の乗組員のうちには長く厳しい航海のせいで重病の者がいたので、上陸して寺院の一角で療養した。その折、補助医のフィッシャー氏は、看護役を引き受けていた医者とおぼしき年長の琉球人がある日、机に向かって何かを書いているのを見て、処方箋だと思い込んだ。「のちに広東に行ったとき翻訳させると、それは次のような処世訓だったことがわかった。『今日を無為に過ごすことなかれ。――青春の日は、ふたたび帰らず――刻苦勉励によって、われらは、栄位に達す』――栄位は、文字通りには『馬上にまたがり、刺繍をした衣服を着る』となっていた。」[34]

5　おわりに：ホール航海記の位置づけ

ホールやマクロードの航海記をめぐっては、従来、琉球には武器も貨幣も存在しないというトピックを中心に議論がなされてきた。また、礼儀正しさなどの徳目の話題が加わっ

32　マクロード、69頁。M’Leod, p. 106.

33　ホール、212-3頁。Hall, p. 159.

34　マクロード、72頁。M’Leod, p. 111.

ても、儒教の伝統の固定的イメージで表象されてきた。それに対して、本報告では、ホールの航海記を道徳的観点から読むという問題提起を行い、そのような観点からホールの琉球での観察の数々を取り上げ、幾つかの項目にまとめてみた。

先に述べたように、ホール後の時代には、琉球に来航する西洋諸国の目的や交渉姿勢が次第に高圧的・帝国主義的なものに変わっていくだけでなく、多分に琉球の側の「交際態度」も変化する。19世紀になって日本近海に外国船の来航が増え、欧米諸国の市場開放への圧力が強まっていくなかで、1825年の異国船打払令（無二念打払令）に見られるように、日本の鎖国的、攘夷的な対外政策も厳格化していき、それが薩摩を通じて琉球にも大きく影響してくることになる。特に1840年代になって、英仏の宣教師が琉球に来航し、長期滞留するようになったことは、日本の危機感を大きく増幅し、日本の（薩摩を介した）干渉をますます強めることになった。こうして、琉球の外国との「交際態度」もかつての余裕を失い、次第に硬直化していくのである。

しかし、このような対外的な交際態度の変化と、琉球社会それ自体の変化とは別の事柄である。ホールらの記録が重要なのは、彼らと琉球人との濃密な交際・交流だけでなく、当時の琉球社会や琉球人の様子や特質が、客観的ないしは第三者的な眼で観察され、描かれている点にある。確かに、彼らの那覇周辺での限られた体験の記録から、琉球についての一般化を行うことには慎重であらねばならない。しかし、ホールらの来航より後の時代になると、上述のような観察や描写がますます困難になっていっただけに、彼の記録は他にない価値を持っているのである。

ホールらの琉球を見る目線は、たんなる東洋趣味のそれでもなければ、サイード的意味でのオリエンタリズムとも異なっている。確かに、アマースト使節団が初回のマカートニー使節団以上の失敗に終わったこともあり、ホールやマクロードの、特に後者の航海記においては、当時の清朝中国や中国人への批判には手厳しいものがある。しかし、それと同時に留意すべきは、彼らの琉球をめぐる記述では、琉球と中国その他の「東方諸国」との違いの強調や、琉球とイギリス（ないし文明諸国）との共通性の指摘が目立った特徴をなしていることである。

ホールらが琉球の伝統において普遍的妥当性を持つとみなした諸特性は、表現に多少の誇張はあったにせよ、近代前夜の琉球社会が持っていた数々の潜在的可能性を指摘したものと言うことができるだろう。そして、その後の琉球・沖縄の近代的変容の過程では、それらのポテンシャルの多くが抑圧され、順調に花開くことはなかったことも確かなように思われる。筆者はホールの航海記を、このような未発の可能性という抗ー事実的（contra-factual）な次元をも包括した理論的視点から「沖縄の近代」についての再考を促す洞察に満ちた記録として位置づけている。

引用・参照文献

ベイジル・ホール『朝鮮・琉球航海記』（春名徹訳）岩波文庫、1986年（原著、1818年）。

J・マクロード『アルセスト号朝鮮・琉球航海記』（大浜信泉訳、真栄平房昭解説）榕樹書林、1999年（原著、1817年）。

『ペルリ提督日本遠征記』(1)～(4)（土屋喬雄・玉城肇訳）、岩波文庫、1948～1950年。

Hall, Basil. *Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea, and the Great Loo-Choo Island*. London: John Murray, 1818.

M'Leod, John. *Narrative of a Voyage in His Majesty's Late Ship Alceste, to the Yellow Sea, Along the Coast of Corea and Through Its Numerous Hitherto Undiscovered Islands, to the Island of Lewchew.* London: John Murray, 1817.

Hawks, Francis L.. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*.... Washington: A. O. P. Nicholson, Printer, 1856.

Beillevaire, Patrick. "The Western discovery of Ryukyu: from the first contacts to the eve of Perry's expedition." *Ryukyu Studies to 1854: Western Encounter part 1*, edited in 5 volumes by Patrick Beillevaire, Vol. 1, 1-27.

Edinburgh Review Vol. 29（1818）: 475-497.

Grayson, James. "Basil Hall's *Account of a Voyage of Discovery*. The Value of a British Naval Officer's Account of Travels in the Sea of Eastern Asia in 1816." *Sungkyun Journal of East Asian Studies*, Vol.7, No. 1, 2007, pp.1-18.

Koh, Grace. "British Perception of Joseon Korea as Reflected in Travel Literature of the Late Eighteenth and Early Nineteenth Century." *The Review of Korean Studies*, Vol. 9, No. 4, 2006.

McCune, Shannon. "Introduction" to Basil Hall's *Account of a Voyage of Discovery*.（Royal Asiatic Society, Korea Branch edition.）Soul: Kyung-In Publishing, 1975, 1-19.

McCune, Shannon. "Introduction" to John M'Leod's *The Voyage of the Alceste*.（Tuttle edition）. Tokyo: Charts E Tuttle Co., 1963, xi-xxviii.

Ryukyu Studies to 1854: Western Encounter part 1, edited in 5 volumes by Patrick Beillevaire, co-published by Curzon Press and Edition Synapse, Richmond/Tokyo, 2000.

キーワード　琉球、バジル・ホール、イギリス、J・マクロード、近代西洋、朝鮮、中国

（NAMIHIRA Tsuneo）